

# 死の陰の谷間

“A Good Man Is Hard to Find” の一解釈

北 垣 宗 治

## I

Flannery O'Connor の短篇小説 “A Good Man Is Hard to Find” の意味を明らかにしようとするとき、読者はいくつかの困難な問題に出くわす。その第一は、いうまでもなく、何故に The Misfit は何の罪もない Bailey とその一家をみな殺しにするか、という問題である。彼は性来極悪非道の悪魔であるかという、決してそうではない。彼の風貌はインテリ的でさえある。にも拘らず、彼の行為はまさしく殺人鬼のそれである。これをどのように説明したらよいのか？

第二は The Misfit と、grandmother (grandmother といえば孫からみて祖母なのであるが、この作品では一家の祖母なのであり、殆ど個有名詞のように言及されている。今後彼女を便宜上「祖母」で通すことにする) との間の宗教的なやりとりである。著者の O'Connor はたまたまカトリックの信仰をもつ女流作家なのであるが、いったい二人の対話はどのような宗教的次元をあらわすものか？ またそれは作品の全体的な意味にどのようにかかわってくるのか？

第三はこの作品のタイトルである “A Good Man Is Hard to Find” は、どの程度この作品の主題を規定するか、という問題である。このタイトルの趣旨が “a truth universally acknowledged” であることを読者に納得させることが、この作品の意図なのであろうか？ それともこの作品の本当の主題は、どこかほかの所に隠されているのであろうか？

第四は、この作品の主人公とってよい祖母をどのように評価するか、という問題である。彼女は Lady である。それと同じ意味ではベイリーの妻（作品の中では彼女は“Bailey's wife”と呼ばれず、いつも“children's mother”と呼ばれる）は Lady でない。彼女は南部の生み出した Lady であるが、息子夫婦や孫たちからはほとんどのけ者扱いにされているにすぎない。この祖母は読者から見て、いったい憐れみの対象であるのか、それとも嘲笑の対象であるのか？

以上、四つの問題を出したのであるが、これらが作品の意味に接近するための最も効果的な突破口を提供するかどうかは別問題として、少なくとも、これら四つの問題を問うことなしには、意味への接近は不可能であることを私は確信するものである。

## II

この作品の筋はきわめて単純で、むしろあっけないほどである。どこにでもありそうな、これといって変わったところのない一家六人が、ジョージア州の山地をドライブしているうちに、ふとしたはずみから車が転覆し、命は助かったが、途方に暮れているところにたまたま刑務所から脱走した三人に出くわし、彼らによって一家はみな殺しにされる。ただそれだけの筋である。この筋はこの世界にひそむ不条理の一面を示すだけである。要するに、この気の毒な一家からすれば、運が悪かったのである。けれども、この作品が伝えるものは、運悪く惨殺されてしまった罪のない人々に対するあわれみの情だけではなく、確かにそれ以上の何物かである。その「何物か」をつきとめるためには、祖母と The Misfit を詳しく眺めていく必要がある。その前に、作品の筋に段落をつけることから始めよう。

物語は大きく二部にわけることができる。ベイリー一家のドライブの場と、The Misfit に出くわしてから一家の惨殺に終る場である。しかしそれは時間の順序に従ってさらに五つの場面に小分けすることもできる。こ

ここでは五段階に分けて検討してみよう。

第一場. 休暇旅行の前日におけるベイリーの家族. ここでこの家族の人間関係があきらかにされる. 祖母対息子夫婦, 祖母対孫の態度が明らかになる. 冒頭のエピソードは, 祖母が新聞に刑務所から脱走した The Misfit の記事を見つけ, それを息子に示して, フロリダでなしに東テネシー行きを主張しているところである. この第一場は, この短篇の描く事件の起こる可能性を暗示する点で, また, もしも一家が祖母の願いに従順であれば, 死を免れたかもしれないことを, 後になって思い出させる効果がある点で, 作品の美事な導入部をなしているといえよう.

第二場. ドライヴに出発. 赤ん坊を除く五人の性格がますます明らかになる. 祖母の Lady としての性格に光があてられる. 子供たちは車の中で漫画に読みふけりながら, 祖母の教育的な説明を馬耳東風と聞き流す.

第三場. The Tower での休憩と食事の場. 五人の性格が今一段と明瞭になるのみならず, Red Sam と祖母の会話は, 祖母の人間観をうまく示してくれる. この人間観は, のちほど The Misfit とのやりとりを通して, 一層浮き彫りにされるのであるが, ここではその導入部的役割をはたしている.

第四場. ドライヴの続きと, 車の転覆事故. この事故の直接の原因が, 祖母にあったことが明らかにされる. しかし, 子供たちにとっては, 九死に一生をえた転覆事故も, 喜びの経験なのであり, 祖母が血みどろの状態で死ななかったことは失望なのである.

第五場. 三人の脱獄者との出会い. 先ずベイリーと息子, 次にベイリーの妻と娘と赤ん坊, 最後に祖母の順に殺される. 祖母と The Misfit の会話(祖母にとっての, いわば限界状況での対話)は, この二人の人間観と世界観をのぞかせてくれる. ことに The Misfit のもつ意外な内的 conflict が彼の告白を通して明らかになる. 恐らく作品全体を通して, この第五場にのみ, 人間と人間との間の communication らしいものが成立する. そ

れは限界状況における communication である。

このように構造を眺めると、緊張の度合いは第四場から第五場へと、尻上りに高まっていく。ことに第五場では自然環境の描写がいくらか抽象画めいてくる。たとえば Behind them the line of woods gaped like a dark open mouth. とあり、すでに森は犠牲者を呑み込む用意ができていくかのように、ぽっかりと口をあけているのである。第五場で、空には太陽も見えず雲の影もないことが少なくとも二度述べられること、“cloudless sky.” というフレーズが二度出てくることもまた、この景色の抽象性を強調する。彼らがおちこんだのは、今までとは全く異った別次元の世界だからである。それはいわば「死の陰の谷」（詩篇第23篇）である。ここにはすでに三人の死の使いが登場しており、死が影をおとしているので、もはや救いの太陽は光を投げかけることもない。そこから見上げる空の部分には雲一つない。死の陰の谷はきまぐれな雲の妨害をも拒否するのである。祖母と The Misfit の対話がなされるのは、実にこの新しい次元の状況においてである。

### III

この作品の主人公を祖母であることに、誰しも異存があるまい。彼女には最も多くの光が当てられている。これに対し、The Misfit の方には、最も強烈な照明が与えられている。この二人は、それぞれ自分自身を客観視するだけの余裕があり、また自分自身の内的な conflict をもつという点からして、intricate characters であるということが出来る。二人に較べれば、他のすべての登場人物は多かれ少なかれ機械的な存在であり、或る一定の役割だけを果たす、いわば機能だけの存在であって、simple characters であるといえよう。

たとえばベイリーはむっつりとした父親で、運転するときにはきわめて神経質になる男である。母親の陽気な気質は不幸にしてうけついでない。

こんなドライブの運転手をしていて、はたして楽しいのだろうかと疑いたくなるほどである。彼は母親が「ワルツを踊ろう」と提案したのに対し、いい年をしてワルツとは何事か、といわんばかりの一瞥を与える。第五場で、一家の主人たる彼は The Misfit 一味を向うにまわして、主人らしく振舞うことができなかった。彼はあっさりと捕虜になり、あっさりと殺されてしまう。もっとも、森の中に連れ去られる前に一度だけ、「お母さん、すぐ帰ってくるからね、待っててね!」と叫ぶ。この時だけ、つまり死の陰の谷においてのみ、彼は息子らしさ——従って、人間らしさ——を見せる。しかしそれもこの作品中一度だけのことなのである。

ベイリーの妻はストラックスをはき、兎のような恰好に耳のついたスカーフをつけた、キャベツのように無邪気な顔をした女である。この描写の中には多少戯画化されている傾向がある。彼女は赤ん坊をただ習慣から世話しているように思われる。John Wesley と June Star に対しては殆ど無関心の態度である。にも拘らず彼女が作品中でいつも“children's mother”として言及されることには、いくらかの皮肉が感じられる。ジューク・ボックスがあれば黙って、機械的に五セント貨を入れる。死の陰の谷間では、さすがに夫の死によって気が動転し、無抵抗どころか、易々として夫の後を追うのである。彼女の場合にも、人間的に生きてくるのはこの場面だけのようなのである。

八歳の John Wesley と、その妹の June Star についていえば、二人は典型的な中産階級のないしは二十世紀後半的な spoiled children である。彼らの反応の仕方は実に機械的である。彼らは小供の materialists である。彼らの興味をつなぎとめるのは、マンガ、祖母がドラマティックに身振り手振りできさせる昔話、サル、そして「秘密のハメイタ」にまつわる冒険の興味である。まさしくテレビ番組に毒された現代の子供の典型を見るような気がする。彼らはふだんは祖母を眼中においていない。いくらでも祖母に口答える。この二人が車の中であばれば、さすがの父親もその要

求を入れてやらざるをえなくなる。ということは同時に、子供たちもまた、車の転覆事故に小さな一役を買っているということでもある。車がひっくり返ったとき、子供たちは流血の惨事を期待していたのである。祖母がびっこをひきながら出てきたのを見て、彼らはがっかりする。八歳かそこらの子供たちがこのように反応することは、はたして正常であろうか？ともあれ、彼らにとってこの事故は、まるで大手柄でもあるかのように、「事故だ！ 事故だ！」と叫ぶのである。

この作品の主人公である祖母は、私の見るところでは、南部の誇り高き伝統を継承している女性である。彼女は自分の州であるジョージア州に関して誇りを抱いている。ジョージアをあしざまに言う孫たちをたしなめ、北隣りのテネシー州についてさえ、同胞意識を隠さない。彼女にはテネシーに親戚があり、テネシー・ワルツのメロディーは、彼女を踊りに誘う。ドライブの道中で、彼女は唯一の説明役である。南部人のプライドから、彼女はドライブしつつある地域の歴史と地理をいちいち説明してやらずにはおられない。たとい他の四人が聞いていようがまいが、それはおかまいなしである。彼女はもと Plantation に属していた古い家族墓地を示す。「風と共に去った」古いよい時代の南部の遺産である。

祖母は Lady である。彼女の物語が暗示するところでは、彼女は元来南部の上流階層に生まれた人なのである。幼い頃の彼女は“maiden lady”であった。そして E. A. T. 氏をはじめ、何人かの同じ階層に属する gentlemen から求婚された。しかし運命は彼女を、一段階下の階層、つまり中流階層の人と結婚させた。しかし彼女は別にそれを悔いていないらしい。The Misfit に出会ったとき、彼の中に“common blood”の出でないことを直観させたのも、彼女のこのような背景から説明できるのである。

祖母の Lady としての誇りは服装にあらわれているだけでなく、その考え方、感じ方にもあらわれている。「子供たちの母親」がそのようなセンスをもたないことは、やはりその服装からも、また彼女の顔つきや消極性

からも知られる。祖母は Lady であるがお高くとまってベイリー夫婦を見さげたり、いわんやシェウトメ根性を出して嫁につらく当たったりはしていない。孫たちにどれほど悪くいわれても、やはりよいおばあちゃんである。孫たちがこの祖母を馬鹿にしているのは、実にベイリー夫婦が母親をないがしろにしていることの間接的な反映なのである。祖母のやさしさは猫の Pitty Sing を三日間家に置きざりにできない点にもあらわれている。

祖母は孫たちに対して、その父母が果さなくてはならない役割まではたしている。一家の中で祖母だけが教育熱心である。彼女はドライブの出発にさいし、先ずメーターのマイル数を手帳にノートするほどに細心である。何日間でも何マイルを走ったかを計算するのは愉快なことであるが、それ以上にここには孫たちの教育の材料にしようという祖母の魂胆が見られる。彼女は上手に孫たちを遊ばせる。サンドイッチをたべ終ると、孫たちに窓からペーパー・ナプキンや箱を投げ捨てないように言ってきかせるのも祖母である。そればかりか、彼女は車の事故のあと、The Misfit の一味に出くわすと、一家を代表して最後まで The Misfit とわたりあうのである。それ故、どのように見ても祖母はベイリー以上の人物であり、一家の本当の実力者なのである。

祖母が明るい性格で、解放的な人格であるということは、時として彼女の虚栄心にはけ口を与えることにもなり、さらには彼女が「おっちょこちょい」になる機会をも与える。祖母のような「善い人」はしばしば「お人好し」にもなるわけである。Red Sam のところを出発したあと、彼女は正面玄関に六本の白い円柱を構えた思い出の邸宅がこの近くだったことを思い出す。それを訪れたくて矢も楯もたまらなくなった彼女は、ついに奥の手を使うのである。彼女は「秘密のハメイタ」というえさでもって、小さな materialists である孫たちをまんまと味方にしてしまう。過ぎ去ったよき時代へのノスタルジアとはいえ、この提案は彼女の虚栄心からもかなりの燃料を補給されている。しかも、それがいのちとりとなるのである。

あけすけの、そして多少軽はずみな性格の故に、彼女は The Misfit の名を本人の前で口にする。これは黙っているべきだったのである。なぜなら、指名手配されている刑務所破りは、いったん自分を知る者に出くわした以上、これを見逃すことはできないからである。ベイリーからこれをとがめられたときは、もはや遅すぎたのである。

この祖母は性来の楽道家である。彼女には人間の本性は善であるという、抜き難い確信があり、これが彼女の人に接する態度にいつも反映している。ベイリーとその妻に対して常に寛容であること（それは一見祖母の方が妥協しているように見えるが、実はそれが彼女の弱さよりは強さの方をあらわしているように見える）、孫たちに対しては明るい忍耐をもって接しており、いつかは自分の善意は通じる時がくることに、ひそかな自信を抱いていること、Red Sam に向かって「あなたは善人だから」と言うこと、しかし、それにもまして、The Misfit との危機的な状況の中で、この脱獄囚をも悪人ときめてかからず、彼の本質的な善を信じて、その善性に訴えようと懸命の努力をしたこと。このように数えあげると、祖母のこの性質が決してにせものだったり、一時の気まぐれの産物などではなかったことがわかる。彼女が単に急場を処理するためにのみ、The Misfit にあのような訴え方をしたのではないことは Red Sam の場合に照らしてみても明らかである。

人間の本性は善であるという彼女の信念はどこから出てくるのであろうか？ それは彼女の宗教的信念なのであろうか？ 私はそれを「宗教的信念」と呼んで差支えないと思うが、しかしそれは必ずしも正しい宗教的洞察に基く人間観から出発したものではない。キリスト教は正統派のローマ・カトリック教であろうと正統派のプロテスタンティズムであろうと、人間を先ず罪人として認識する。しかし、この罪人は救われうる罪人なのであり、善を行いうる罪人なのである。そして、この場合人間の善性のみを強調しすぎて、人間の罪人性を忘れるとき、それは正統なキリスト教人



人間観たることをやめるのである。逆もまた真であって、人間の罪人性を強調するあまり、それが善を行う力さえもないと断定するなら、これもまた正統なキリスト教人間観たることをやめるのである。このような観点から祖母を眺めるならば、彼女の人間観が、正統なキリスト教の人間観から少しはずれて、リベラルな人間観の方向へ、それ故「甘さ」の方向へ、傾斜していることがただちに指摘できるのである。すなわち彼女の信念はその堅固さにおいて宗教的であるにもかかわらず、その人間観はキリスト教の線からすれば、多少リベラル寄りになっているというべきである。

だからといって、O'Connor は祖母を非難したり、いわんや戯画化しているわけでもあるまい。なるほど彼女は車の中で居眠りする。長時間のドライブの同乗者が、特に食事のあとでどれほどの眠さに襲われるかは、経験者なら誰でも知っている。なるほど彼女はいびきをかく。しかしそのいびきは祖母の人格を傷つけるであろうか？ それはむしろ彼女の天真爛漫な性質、誰の善性をも信じる代りに誰をも恐れない性質（むろん Pitty Sing を旅に連れていくのにベイリーの怒りを恐れた点を考慮に入れてもよい。しかしドライブのさい中、猫のことは忘れ去られている）をこそあらわしていると見ることができる。祖母は愛すべき老女であって、その行動の一つ一つを著者は暖い好意をもって描写しているということができる。祖母を嘲笑するような調子は感じられない。

前に祖母の虚栄心や「おっちょこちょい性」を指摘したが、彼女が決して理想的な、完全な人物ではないことを示すために、今少し彼女の限界性を取上げよう。そのよい例は、例の黒人の子供に対する態度である。あのズボンをはいていない子供が車にむかって手を振ったとき、彼女はそれを一個の絵と見た。そこには純粹の美的な動機だけがあるのであって、人種的偏見は祖母の側に（そしてこの家族の中の誰にも）ないといえよう。彼女はその子がズボンをはいていないのは、ズボンを買ってもらえないくらいにまで家が貧しいのだということを認識している。しかし、この認識は

別に祖母の胸を痛めはしない。ここには米国社会の恥部というべき黒人問題の意識はなく、黒人の現状はそのまま肯定されている。彼女はその黒い子供を、孫たちの新しい社会教育・道徳教育の材料にはせず、ただ審美的に鑑賞しただけであった。Red Sam が彼女と次のような会話をするとき、

“A good man is hard to find,” Red Sammy said. “Everything is getting terrible. I remember the day you could go off and leave your screen door unlatched. Not no more.”

He and the grandmother discussed better times. The old lady said that in her opinion Europe was entirely to blame for the way things were now. She said the way Europe acted you would think we were made of money and Red Sam said it was no use talking about, she was exactly right.

ここには古いよい時代へのノスタルジアが二人の意見を一致させるのであるが、その考え方は陳腐であり、型にはまっており、浅薄でさえある。祖母はどちらかといえば知的な女性であるが、上のような会話が平気でできるほどに平板で、無感覚な一面をもっているのである。

以上、比較的くわしく祖母の性格に光をあてた上で、車の転覆事故が彼女の性格とどのようにかかわってくるかを検討しよう。いったい、この事故に対して彼女はどこまで責任があるのか？ 彼女は自分に責任があることを自覚して赤面するが、自分の重大な思いちがいベイリーや孫たちには伏せておくだけの抜目のなさがある。六本の白い円柱の正面女閘をもち、二つの東屋がその前におかれている思い出の大邸宅を訪ねたいという希望は、彼女の南部的な虚栄心から出たことであった。彼女は言葉巧みに孫たちを味方に誘い、遂にベイリー運転手の決心を変えさせる。しかし、彼女の甚だしい思いちがいに気付いた瞬間、彼女の足があがり、隠していた猫がとび出すのである。あわてたベイリーがハンドルを切りそこねて、車は転落した。このようにして、一切の責任は祖母にありそうに見えて、なお

ここにその責任をつぐなうに余りある先行の事実が存在するのである。それはドライブに出発する前日に、フロリダに行くといっぴきかないベイリーや孫たちを、何とかしてテネシーに行かせようと説得したことである。彼女は The Misfit の脱走記事を示して、決心をひるがえさせようとした。誰もそれに同意する者はなかったのである。あらゆる努力は払ったが、だめとわかると、彼女は翌朝まっさきに車に乗込んだのである。こうした事情を考慮すると、祖母の責任は帳消しにはならないにしても、フロリダに行くといっぴきかかなかったベイリー親子のかたくなさの上に、責任のかなりの重さがのしかかってくるのが明らかになる。

## IV

ここで、先を急ぐために、この小論のさいしょにあげた第一の問題に立ち戻ることにする。なぜ The Misfit は罪もない一家をみな殺しにしたのか？ 自分を指名手配中の脱獄囚と認めた者は何びとであれ消してしまう、というのが彼の主義であれば、もっと短い時間で六人を一挙に殺すこと、そして欲しいものを奪い去ることはできた筈である。ところで、The Misfit のやり方はきわめて巧妙である。Hiram と Bobby Lee とは The Misfit の完全な手足となって動いている。先ず一家の唯一の戦闘員ともいべきベイリーが、八歳になる息子と一緒に殺される。ベイリーさえ片付ければ、あとは何をしようとする勝手である。彼の着ていた空色のオームの模様のついた黄色のシャツは The Misfit が着ることになる。The Misfit は残った女たちを木に縛り、金を奪って逃げることもできた筈である。しかし彼らはそうせずになおも時間をかせぐ。すでに The Misfit と祖母の間には、或るやりとり、死の陰の谷間での communication が始まっているからである。祖母の訴えに触発されて、The Misfit は意外にも自分の話を語り始める。The Misfit は多少の妨害は物ともせずに自分のペースで話し続ける。今まで夫が着ていたシャツをつけた The Misfit を前にして、

苦悶に息をつまらせかけた妻と娘と赤ん坊が森の中に連れていかれる。残るは祖母だけである。彼女一人くらいなら、そして善人であることが誰の目にも明らかな彼女だけなら、ここに置き去りにしても何ら差支えないところである。にも拘らず、彼女もまた殺される。ただし、The Misfit 自身の手にかかって。

面白いことに著者は The Misfit の一味を性的に餓えた男たちとしては描いていない。たとえばベイリーを殺したあと、残りの家族をどこかに縛っておいて、ベイリーの妻だけを森の中に連れ込むことは容易に出来た筈である。それをしなかったのは油断しないためであったのか。しかし、それにしても六人を殺すのに時間がかかりすぎている。してみると、この殺害には The Misfit の方に、恐らく彼の性格と関連して根深い理由があるのではないか、という気がしてくる。彼の内的な conflict を見ていくことが必要になってくるのである。

先ず彼は祖母の「あなたは善人です」という訴えに答えて。「いや、奥さん、わたしは善人ではないが、この世の最悪人でもありません」と答えている。この自己認識は非常に大切である。なぜなら先に論じた正統な、キリスト教的人間観に照らし合わせるとき、The Misfit のこの自己認識は祖母のそれ以上に正統的だからである。この意味で祖母に比べて、彼は一層正しく自分を見つめているとさえいえるのである。太陽も当らぬ代りに、雲の影もささないという、中間の状態としての実存の把握である。

The Misfit は二つの大きな conflicts に悩んでいる。そしてそれを引出しえたのは祖母の卒直な、必死の訴えの結果である。あのような状況で、初対面の老女にながながと自分の生い立ちを語るということは異常なことではないだろうか？ 祖母以外の誰にそれを可能ならしめる者があつたらうか？ The Misfit における内的な conflicts は、第一に、罪と罰の不釣り合いの感覚であり、第二に、イエスが死人を復活させたかどうかにかまつわる、主体的な苦悩なのである。そしてこの二つの conflicts を直接に結ぶ

ものは、彼のイエスに対する態度の問題である。

The Misfit が自分をその名で呼ぶのは、自分の犯した罪と、自分に社会が課した罰との間に調和がとれないからである。彼はこの世の不条理をその言葉で認識している。この不条理に対して、彼は懸命の反抗を試みる。先ず脱獄することによって、次に人を殺したり、放火したり、その他あらゆる反社会的な行動を犯すことによって、この世のバランスを狂わすことが彼の目標になってくる。そうしなければ彼の気持はおさまらないのである。それは千本の刀を奪おうと決意した弁慶の執念にも似ている。彼にとって、この世のバランスをくつがえすことが、彼の内部のアンバランスをバランスへと回復していく唯一の道である。ここに至って、彼はこの世のバランスをくずした点での大先輩を、意外にもイエスに認めたのである。イエスと彼とは、バランス破壊の原動力であるという点では同類なのである。しかし相異点は、イエスが何ら罪を犯すことなしにそれを達成したのに対し、The Misfit は罪と呼ばれる数々の行為を犯すことによってそれを達成しようとすることである。

今一つ The Misfit の心を捉えてはなさない問題がある。イエスは死人を甦らせたというが、はたして本当であるかどうか？ もし死人を甦らせたことが本当であるなら、彼もまたやがて甦るのであり、彼が殺した人々も甦るのであり、彼の行為は一切無意味になる。そうなればこの世のバランスを The Misfit がいくら破壊したところで、破壊した矢先からイエスがより高い次元でバランスを回復していくのであって、The Misfit にはとうてい太刀打ちはできなくなる。（イエスにおける、より高い次元でのバランスの回復事業は、ニーチェによって「諸価値の価値転換」と呼ばれたものであって、それはこの世的な次元では、むしろバランスの破壊に見えるのである。）彼はそのイエスを信じたい、しかし信じることができない。信じられない苦悩は、ついに、せめてイエスの時代に居合わせて、イエスが死者を復活させる場面を目撃したかった、という魂の叫びになって

あらわれるのである。The Misfit の叫びは完全な救いにも入れず、かといって完全な墮落にも入れない者、すなわち「死の陰の谷間」の住人の叫びなのである。

これに対して祖母の方はイエスをどう見ているか？ 彼女はイエスをキリスト（救い主）であると信じている。祈ればキリストが助けて下さる、というのが、彼女の単純な信仰である。彼女は The Misfit に向かって、祈りなさい、祈りなさいと、繰返しすすめるが、男の方はついに祈ることを拒絶する。ところで祖母に関して皮肉なことは、The Misfit の心の中からほとぼり出た最も重要な質問に対して、実にアイマイな返事をしたことである。「ひょっとしたらイエス様は死人をよみがえらせなかったかもしれませんね」。これは祖母が自分でも何を言っているのかわからない状態でそう言ったのである。しかし、彼にとっては、これが生死に関わるほどの深刻な問題であったことは、彼の声と、顔がひきつれるほどに歪んだことからわかる。これに対して祖母は「母性的」に反応する。彼女はつぶやく。

“Why you're one of my babies. You're one of my own children!”  
こう言って彼女は手をのべ、彼の肩にさわった。その瞬間、彼はヘビに噛まれたかのようにとびさがり、彼女の胸に三発の銃弾をぶちこんだ。宗教的問答から発砲へのこの急変はいったい何を意味するのか？

祖母の性格の特長の一つは、彼女が他人を実際あるがまま以上のものと見做す傾向である。その意味では、この作品のタイトルにある“good man”はこの作品では祖母一人にだけあてはまるフレーズなのかもしれない。作品の終局の場面によると、復活の問題に spiritual quest の重みの全部をかけている男を見出して、祖母は感動のあまりに「あなたはわたしの子供です」と言うのである。（このとき、いみじくも The Misfit が殺された息子 ベイリーの黄色いシャツを着ていたことをも思い出したい。）The Misfit のピストルが火を吹くのは殆どその瞬間なのである。かつて

彼女の善意はベイリー夫婦や孫たちからは、無関心ないしうるさいこととして扱われてきた。The Misfit の場合、彼女の敵であることを忘れて、息子であると直観する善性の極致は、電流のように衝動的に暴力に点火するのである。すなわち彼女の手が彼の体にふれるということは、指先から彼女の愛がじかに伝わることなのであり、愛によって彼が彼でなくされてしまうこと（その限りでは、彼女は一瞬イエスの代行者としての性質を帯びてくる）を直観した彼は、引金を引くことによってイエスを拒絶するのである。彼が拒絶したのはイエスであって、祖母ではなかった。

作品は次のような会話で終わっている。

“She was a talker, wasn't she?” Bobby Lee said, sliding down the ditch with a yodel.

“She would of been a good woman,” The Misfit said, “if it had been somebody there to shoot her every minute of her life.”

“Some fun!” Babby Lee said.

“Shut up, Bobby Lee,” The Misfit said. “It's no real pleasure in life.”

（「あのばばあ、おしゃべりでしたな」

「あいつは一生涯のどの瞬間に撃たれたにしても、よい女だったといえるよ」

「一寸面白いですな」

「黙れ、ボビー・リー。この世には本当のたのしみなんてありません」

The Misfit のセリフは祖母に対する 讃辞であることは明らかである。今殺したばかりの老女は、空を仰いで微笑するかのよう、半分坐り半分横たわるようにして動かない。それは The Misfit と自称する彼をも善人として相対した恐らく初めての人物、彼に祈ることを母親のごとき権威をもって迫った人物、遂には彼に触れることによって、彼の死の陰の谷間を

一変させかけた人物の、なきがらなのである。

作品のタイトルが言うように、「善人はなかなか居ないものである」。しかし、この作品では真の善人は結局のところ祖母だけなのであった。そして、彼女が真の力を発揮するときには、善悪を超越した力が働いたのである。しかしそれを瞬間的に経験したのは The Misfit だけであった。そして彼は、そのような経験にも拘らず、悔恨に似た気持ちもちながらも、依然として死の陰の谷間にとどまることを選ぶのであった。